
魔法少女リリカルなのはstrikers ~ ~ ~ 1つの思い ~ ~ ~

ノスコード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはstrikerズズズ1つの思いズズズ

【Nコード】

N1193N

【作者名】

ノスコード

【あらすじ】

これはstrikerズあたりのお話です。

*あまりなのはに詳しくないんでアドバイス等くれたら嬉しいです。

晴れ時々晴れ。つまりずっと晴れ（前書き）

初めての2次創作なんです。

晴れ時々晴れ。つまりずっと晴れ

Side???

「じゃあ兄さん行ってくるよ。」

行ってきまーす。

「あれ？今日やったっけ行くの？」

「正確には明日だけど先に行っで見学でもしてこようかと。」

楽しみだな〜ミッドチルダ。

あのね〜遊びに行くんじゃないんだから 分かってるよ姉さん。
…ならいいけど。

「じゃあ行ってきまーす。」

っあ。まってよ〜

2人の姿がどんどん小さくなっていく。
いっちゃいましたね。

「まあいいんちゃうか？あいつら楽しみにしとったから。特に烈の
ほうは。」

向こうではキルト＝レッツって名前だから気をつけて下さいよ。マ

スター。

「はいはい。分かっとるよ。じゃあわいもいつてくるかの。」

行つてらっしゃいませ。マスター

すると男の足元に魔法陣が出現し姿を消した。

残されたのは黄色髪をした女性が1人。

さみしくなりましたね。

遠くを見つめながら呟く

「私がいるでしょ？」

彼女の手首についているブレスレットが光る。

………うん。そうだね。

ミッドチルダ 機動六課

「明日から新しい人くんのはやて？」

「そうなの？はやてちゃん？」

「そうなんよ。2人くるんなけどな。でも2人とも身元がはっきりしてないんよ。」

はやてと言われた髪の短い女性は2枚の資料を見ながら目を軽く細める。

「ちょっと貸して。はやて。」

「はい。フェイトちゃん。」

フェイトと呼ばれた金髪の女性は2枚の資料を受け取り目を通す。

「キリト」レツ執務官にメリウル執務補佐官。確かに詳しい所載は何にもかいてないね。」

そこには名前と写真と生年月日と少しメモ程度に書いてあるだけだった。

「じゃあなんでこんな所に配属になったの？はやてちゃん？」

「それがミゼット提督からのお願いなんよ。若いから色々な経験を積ませてやってってくれて。」

「「ミゼット提督」」

その言葉にビックリする2人。

「そおなんよ。でも魔導師ランクはキリト執務官がAA-でメリウル執務補佐官がSランクなんよ。それに2人とも私らと同じぐらいの年齢なんよ。」

「へえ」。楽しみだね。フェイトちゃん。」

「そうだね。なのは。」

2人は楽しみそうに廊下を歩いていくなかはやてだけは何か考えて

いた。

晴れ時々晴れ。つまりずっと晴れ（後書き）

できる限り次をはやめに投稿したいと思っています。

感想 意見お願いします。

機動六課（前書き）

なんか意見分かんなくなってるかもしれないけどそこはなにとぞ。

機動六課

side レッ

ミッドチルダ近郊

そこには黒髪の青年と綺麗なスカイブルーの髪の女性があたりひろく見渡していた。

「わあ、ここがミッドチルダか。」

なんかすごい楽しそうなどだね。マスター

「アリウル。ここではせめて執務官とかじゃないと...。」

あつそか、すみませんレッツ執務官

「分かればよろしいアリウル執務補佐官」

といいながら軽い笑みをレッツは浮かべていた。

「どっかいきたいところある？アリウル？」

海を近くで見たいです執務官殿。

と敬礼しながら言うアリウル。

「なんか変な気がするけどまあいいか。じゃあいこうかアリウル。」

2人はまた駆け出して行った。

side機動六課

機動六課のアタックチームは今トレーニングの終わりに向かっていた。

「

機動六課のアタックチームは今トレーニングの終わりに向かっていた。

「ええつと最後は模擬戦だな。」

赤い髪の女の子が紙をじつと見ながら言つと、

「でも今日なのはさんいないですけどどうするんですか？てかそもそもなんでいないんですか？」

「始めに言つてたでしょスバル。どうしてもやっとかないといけないことがあるつて。」

「そうだったけ？」

髪を2つにとめている女性が髪の短い女性に呆れている。

「でも何だろうね。エリオ君」

「そついえばフェイトさんも仕事がつて言つてたよね。キャロ。」

周りより1回りぐらい世代が違う2人も不思議にしている。

「おゝいいゝか、今日の模擬戦は4対2のチーム戦だ。」

「……っえ?」「」「」

「だから私とシグナム対お前らだってことだよ。」

その言葉を聞くと4人がそれぞれの反応をする。
きょんとしているもの。

頭を抱えているもの。

何か祈ってるものもいる。

「そんな焦ることはない。今回私たちは地面から離れないし、歩いて動くから追撃もできない。お前らゆつくり作戦も練られるというわけだ。制限時間は1時間。その間に一撃入れないとお前らにペナルティらしいからな。」

「いや絶対無理ですよ。無理無理無理無理」

「ああもうがたがたうるせいなあー。なんなら今すぐ初めてぶったおしてやろうか。」

ヴィータ足でどんと地面を踏みつけ若干きれる。

「じゃあもうおれらもう中にいるから30分後スタートな。」

そういつてヴィータは奥のほうに去っていく。

「あいつも楽しみなんだよ。まあ私もだがな。」

そつつげてシグナムも奥に去っていった。

「やるしかないみたいね。」

溜め息まじりにティアナがいうと

「頑張ろティア。」

笑顔で拳を握りながらスバルはいった。

「頑張ろーねエリオ君。」

「そうだねキャロ。」

「みんな集まって、いい今回の作戦は………」

sideレツ

「うわーきれいですね。」

両手開きながらアリウルはいった。

「そうだね………」

しかしレツは遠くを見ていた。

「どうしたんですかレツ執務官？」
顔を覗くアリウル。

「いやなんか向こうで爆発音が聞こえたようなきが。」

「…………私には聞こえませんが？」

「行ってみよつか？」

聞きながらもレツは走りだした。

「私はもうちよつと海を……………ってまってくださいよ……………」
sideスバル

「やっぱ無理だよこれ……。みんなとははぐれちゃうし。」

スバルは1人ビルに隠れて腰を落としていた。既にもうバリアジャ
ケットは少しボロボロになっている。

「シグナム副隊長もヴィータ副隊長も容赦なかったし。近づいたら
攻撃する暇くないし。」

シグナムもヴィータも全力でやっている。
だから1対1じゃ勝ち目は低いことは分かっていたからティアが作
戦いってただけと闘ってるうちに忘れちゃったし。

と1人で頭を振っていたらわずかだけど足音が聞こえてきた。

「……………まさか。」

スバルすぐに壁により攻撃体制をとった。

「……………あたって砕けるだね。」そうしてスバルは全力の右ストリートをはなった。

s i d e レ ツ

「あいつどこいったんだ？」

闇雲に走り回っていたら気づいたらはぐれていた。

周りは似たようなビルばかり。しかし壊れてるビルや綺麗なビルがあった。

「……………戦闘中か？……………殺気を僅かに感じる。」

そしてレツは目の前のビルをじっと見る。

「……………あそこか。」

そしてレツは前のビルを見つめたまま腰にある刀にてをのせ目を閉じる。

「……………陽炎。」

小さく呟くと彼の前にもう一人レッツが出現した。

幻術のほうのレッツは前のビルに向けて歩き始めた。

「……………瞬雷。」

そうまた小さく呟くとレッツは前あるビルの3メートルぐらい後ろに移動した。

「…あの子か。」

そうしてビルに潜む、

「あの格好どつかでみたことあるような。」

腕を組んで悩んでいたらその女の子は自分の幻影に思いっきり右ストレートをかましていた。

「……………攻撃したから敵だね。」

まだあの子はビックリしていてこちらにきづいていない。

叩くなら今だ。

レッツは腰にある刀に手をやり目を閉じた。

「……………瞬雷」

地面をけり一瞬で相手のふところに入り込む。

すると相手はさらにビクリしているような顔だ。

お構いなしにオレは刀を鞘ごと持ち上げ先をアッパーの形で顎に命中させた。

彼女は2メートルぐらい先に跳び気絶した。

ゆっくり近づいて彼女の顔を覗き込む。

そして彼女の格好をみる。

「やっぱり誰かのに似てる気が……………」。

そう考えていると向こうからアリウルが走ってくるのが見える。

「レッツ執務官！ここどうやら機動六課の練習場らしいですよ。」

……………っえ？

てことはまさかこの人機動六課の人なの！

……………

近づいてくるアリウルに向かって走って近づき手を掴んで、

「どうしたんですか？執務官？」

「逃げるぞ。」

「えっどうし「瞬雷」えっえっえっ。」「

訳の分からないアリウルをよそに激走。

すると青かった髪が少し黄色になっている。

「執務官髪が、落ちついてください。」

「そんな落ちついていられるかっ。」「

……誰かに見られたきがするけどいつか。

「執務官だからなんですかっ。」「

アリウルの声が機動六課全域に響いたとか届かなかったとか。

機動六課（後書き）

意見 感想 お待ちしてます・

なにとぞ何卒ナニトゾ~~~~~。

ちょっとまってくださいよ~~~~(前書き)

これからも不定期更新でいこうとおもいます。

ちょっとまってくださいよ〜

side スバル

機動六課医務室

「あれ？ここは？確かわたし……………」

あれ？何してたんだっけ。確か模擬戦をしてて、誰か来ると思っておもいつき殴ったらぶっ飛ばされたんだっけ。

「あの人誰だったんだろ……………」

「スバル！きがついたの！！」

ドアが開いてティアナが駆け込んで来る。

「どうしたのティアそんな慌てて。」

「だってあんたが時間過ぎても姿見せないし探して見れば倒れてるしさ。何が起きたの？」

私は話そうとして体を起こそうとしたら頭がふらふらしてうまく起こせない。

「脳震とうらしいから動かないほうがいいわよ。」

ティアナが心配そうな声で言った。

そして私は寝たままあのときのことを話した……………。

ティアナに話しをしてている間に大分楽になった。

「要は不意打ちしようと思ったら不意打ちを受けたと。」

「まあそうなる……………」

「じゃあその人スパイかもしれないわね。」

「スパイ!!」

考えても見なかった。

確かにあり得るかも。

「さらに複数の可能性があるわね。」

ティアナはうーんと唸っている。

「なんで複数なの？」

「ああスバルが見たのは青い髪の人でしょ。でスバル探しているときにシグナム副隊長が一瞬だけ黄色の髪の人を見たような気がするって言ってたのよ。だから。」

「へえ〜。」

「ああそれとなのはさんからで今日は一日ゆっくりしてなさいって。」

「ええ〜ヒマじゃん。ティア〜遊んでよ〜。」

「私はこれからあなたの分事務処理をしないといけな「グ〜〜」寝るな〜。」

次の日 機動六課隊長室

そこにははやてとリインホース？が席に座っておりその前にレッツとアリウルが立っている。

レッツの両耳には昨日までなかった左にエメラルドグリーン右にエメラルドブルーのイヤリングがありアリウルは右手首に空色のブレスレットがあった。

「キルトⅡレッツ執務官であります。」

アリウル執務補佐官であります。

そう2人が敬礼しながらいうと、

「うん。これからよろしゅうな。」
「よろしくです〜。」

2人は初対面とは思えない笑顔で迎えた。

「まあこれからすぐに入隊式やから詳しい話はその後やわ。それと入隊式言うても隊長達とフォワード陣の人達と技術系の人が数人って感じやから。」

「了解しました。」

「そなかとうならんでも。柔らかくよ柔らかく。」

それを聞いたとたんアリウルが

そうですか？ いや〜こういうのなれてなくて。

「おいアリウル「ええよそれぐらいのほうがうちらも助かるで。」
…部隊長が言うなら。」

「もうそろそろ時間ですよ〜」

「ありがとなりイン。ほないこか。」

そうつって立ち上がるはやて。それに続くリイン。

なんか楽しそうだね。レッ

「どうだろうな。オレには何かあるように感じたけどな。」

はやての後ろをじっと見ながら続いて歩いていった。

………何か感じる彼女には。

部屋をでて廊下を歩くと広いエントランスにでた。

はやて部隊長からの説明をつけ自己紹介を始める。

「キルト」レツ執務官であります。皆さん若輩者ですがよろしくお願いします。
願います。」

アリウル執務官補佐です。皆さんよろしくお願いします。

軽く話しがあり終わろうとしたとき。

「やっぱりあの人です。私がやられた人。」

と大きな声で喋る女の子がいた。

「あつ。」

……… やっぱりだったか。まさかとは思ってたけどまさか当たるとは。

と表情は変えず、なんとか平静を保っているとなんかすごい悪寒が。

「キルト執務官はこのまま私の部屋に来てな」

まっ
てく
れ
~~~~~

ちょっとまってくださいよ~~~~(後書き)

感想 意見 なんでもいいんでまってます。

やっぱり刀ってかっこいいですね（前書き）

自分でした。  
話し進まないな。

やっぱり刀ってかっこいいですね

機動六課隊長室

ここには今はやてとキルトの2人だけいる。

そしてキルトはなぜか正座。

「……………つまり偶然練習場に入っちゃってやっちゃったと。」

「まあはい。」

「それは君1人か？」

「はいそうですけど。」

「いやな、髪が黄色のも目撃情報があるんよ。」

「……………それ自分です。」

「……………へ？」

「自分です。」

そういうとレツは何か小さく呟くと髪が黄色になってきた。

「どういうことや？」

はやては驚きを隠せないでいる。

「自分魔力コントロールが苦手で普通足元に魔法陣できるじゃないですか。それを隠そうとしてやってみたら髪に反応しちゃったんですよ。ちゃんと集中すれば問題ないんですけどね。」

「魔法陣を隠す?」

「はい。だってあつたらこれから魔法うちますよって予告してるのと同じじゃないですか。だからです。」

まあ確かにと納得するはやて。

「でもピンチのときとかはどうすんねん?。集中ゆつても無理あるんじゃない?」

「そういう時にオレらの出番ってわけよ」

「何言ってるのよ。あたしでしょあたし」

突然2人の機械的な声が聞こえる。

「っへ?」

「驚かせてすいません。こいつらですよ。」

そついうとレッは両耳についてるイヤリングに手をやった。

「デバイスですよ。右がレン、左がサン。まあどちらでもできますが基本はレンがしてくれます。」

「よろしくな」

「よろゝ」

「なんか随分にぎやかそうやな。」

「楽しいですよ。」

「じゃあその刀は？」

はやては次に腰にある刀を指摘した。

するとレツは腰に手をやり刀を抜きはやてに見せた。

「本物ですよ。まあ切れませんがね。」

「切れないって？」

「よく見てください。逆刃刀って言って逆になってるんです。」

そいうとレツは少し顔がけわしくなった。

「人の命はかけがえのないものですから……………」

「……………せやな。」

2人は少し黙りこんでしまった。

「すみません。なんか」

「いやべつにんなことあらへんよ。」

「それで自分はこれからどうすれば。」

「ああそやったそやった。」

はやては机の中から4枚の紙をだしキルトに渡した。

「これは？」

「明日から機動六課にくる予定の子達や。それでなキルト君にはこの4人の教導官になってほしいんや。」

「……マジですか？」

「もちろんや。色んな経験つませてやってくれって言われとるからな。」

「だからって教導官なんてしたことないですし。」

「いいきかいやないの。」

どうやらやるしかないようだ。

「わかりました。やるからには全力を尽くしますよ。」

「なんや、やる気マックスやないか。」

キルトはため息を吐いた。

なんかこの人苦手だな。

「そや。キルト君。」

振り返って見るとさっきまでには見えなかったはやての顔があった。

「何ですか？。」

「キルト君。きみは何もんや。」

するとキルトは笑顔で答えた。

「今はまだ秘密ということぞ。」

そういつてキルトは部隊長室をでた。

やっぱり刀ってかっこいいですね（後書き）

sideレシ

はやて部隊長なんか確信を得た感じだったな。

よく分かんあの人。

## 教導官（前書き）

本当ゆっくりですいません。

別に受験生だからとか文化祭があったからってわけでもないですよ。

## 教導官

sideキルト

機動六課隊長室

「まさかこんな広い所くれるとはな」

「ね、前の所とは天と地の差だね」

楽しそうに会話するレンとサン。

「たまには少し静かにしてくれないか。2人とも。」

この2人は普段は一緒にいると楽しいんだけど仕事のときがな。

「なによ。そんなこと言っちゃうと仕事手伝わないはよ。」

「おまつ。それはずるいだろ。」

「別にいいんだよ。キルトが毎日毎日徹夜で仕事してボロボロになっても」

「……………すいませんでした。」

「分かればいいんだよ」

どうがんばっても2人には勝てない。特にレンには勝つのかの字も見えない。

「そっぴや今日からだったよな。お前の仕事。」

そうだった！！ここに来てからなんかデスクワークばっかで完全に忘れてた。

「何時からだっけ。」

「……………12時からだな。」

時計に目をやる。

時計は10時30分をさしている。

「……………なんだか急に体調が」

「何言ってるのよ。この仕事がメインなのに」

「だって今日何やるか全く考えてないんだよ。」

移動してから今日までですでに労働基準法なんて完全に無視してる。

「アリウルはなんかはやてさんとどっか行っちゃうし。」

アリウルはずっとはやてと共に行動しているらしい。

たまに連絡がくるといゝんな地方のグルメレポートしかよこさない。

「……………自殺したら楽になるかな……………」

キルトはなにか遠い空を見ている。目の先あるのは壁だけど  
「しょうがないな」キルトは。じゃあこうすればいいんじゃない  
?.....」

side???

「おせえな教導官。時間軽く過ぎてるぜ。」

「まあそういうなよ。きっと忙しいんだよ。」

「でもさ」せっかく機動六課に入れたんだからなのはさんやフェイトさんの所にいきたかったよね。」

「しょうがないな」キルトは。じゃあこうすればいいんじゃない  
?.....」

side???

「おせえゝな教導官。時間軽く過ぎてゐるぜ。」

「まあそういうなよ。きつと忙しいんだよ。」

「でもさゝせつかく機動六課に入れたんだからなのはさんやフェイトさんの所にいきたかつたよね。」

「……………」

#### 機動六課訓練場前

今ここには4人の新しい機動六課局員がいる。

「いやでもいくらなのは教導官みたいな凄い人でも女に教わるのはな。」

元気が有り余っているのか落ち着きのない赤色の髪をした若い男。

「でも知ってるか？ オレらの教導官、あんまオレらと歳変わんないらしいぜ。」

木にもたれながら本を読んでいる青色の髪の青年。

「でもその歳で執務官になるってすごいよね。」

こちらも落ち着きがないのかずつと体を動かしている髪の短めで黒の髪の女の子。

「しょうがないな〜キルトは〜。じゃあこうすればいいんじゃない?.....」

side???

「おせえ〜な教導官。時間軽く過ぎてるぜ〜。」

「まあそういうなよ。きつと忙しいんだよ。」

「でもさ〜せつかく機動六課に入れたんだからなのはさんやフェイトさんの所にいきたかったよね〜。」

「.....」

機動六課訓練場前

今ここには4人の新しい機動六課局員がいる。

「いやでもいくらなのは教導官みたいな凄い人でも女に教わるのは

な。」

元気が有り余っているのか落ち着きのない赤色の髪をした若い男。

「でも知ってるか？ オレらの教導官、あんまオレらと歳変わんな  
いらしいぜ。」

木にもたれながら本を読んでいる青色の髪の青年。

「でもその歳で執務官になるってすごいよね。」

こちらも落ち着きがないのかずっと体を動かしている髪の短めで黒  
の髪の女の子。

「私は懂れるな。」

手をもじもじしながら言う栗色の長髪の小柄な女の子。

何分待っただろうか。

向こうから管理局の人らしき人が小走りで向かってくる。

「ふゝ時間ぴつたりか」「30分遅刻だよ」………みんなごめん」

来てそうそう謝るって。

本物を見てみると話していたよりさらに若く見える。下手したら同  
い年なんじゃないかと思うくらい。

「自己紹介させてもらっね。執務官のキルト」レッツだよろしく。え  
っとじゃあそっちから自己紹介してくれる？名前となんで入隊し  
たのかと一言。」

「ショウ＝タチバナ二等陸士であります。入隊した理由は憧れですかね。キルト執務官がこんな若い方だとは思いませんでした。」

「カイン＝ストライト二等空士であります。自分は小さい頃に捨てられて管理局で育ちました。だから本当の親を見つけるために力をつけたいからです。」

「ヒカリ＝ナカタ三等陸士であります。私はなのはさんに憧れて入隊しました。正直せっかく機動六課にきたのになのはさんに教えてもらえないのは残念です。」

「アイリ＝セルフイア三等空士であります。私は恩返しがしたいんです。拾ってくれた今の親に。よろしくお願いします。」

一通りの自己紹介が終わる。

「みんな堅いなもつとリラックスしないと」  
4人はどちらかという困っていた。

「まあ徐々にね。じゃあ今回はみんなの実力みたいから1対1を僕とやってもらおうかな。時間は30分で一撃入れるか30分一撃食らわなかったら君達の勝ちだ。」

この言葉を聞いた途端4人が一斉にみた。  
「どした？」

「キルト執務官の魔力ランクってA++ですよね？」

「そうだけど？」

「あの、その、大丈夫ですか？」

「なにが？」

「オレ達そんななめたれてるんすか？」

「なめてなんかないよ」

「いやだって……」

突然キルトの周りから大量の魔力が一瞬はじけた。

とてもじゃないがA+がだせる魔力をオーバーしてる。

「やってみれば分かるよ。」

それだけ言っでキルトは訓練場に入っでいった。

残された4人は、

「……………」

**教導官（後書き）**

次も多分遅い……

感想お待ちしております

## キルトさん（前書き）

遅すぎてすみません。

決して終わったりはしませんからどうかよろしくお願いします。

## キルトさん

「じゃあ今日はこれまで。」

とは言ったものの4人とも相当疲れている。

「やりすぎだなキルト」

「だって4人とも強かったから……」

「まあ確かにあそこまでやるとは思わなかったけどな」

勝負結果0勝4敗

みんな30分の時間切れ。

いくら本気じゃないとはいえよく反応していた。

「じゃあ明日は朝からやるから。」

4人の顔がひきつる。

「大丈夫だよ。明日はかるくして、見てもらいたいものがあるから。」

それを聞いて4人は軽く顔がゆるんだ。

「見てもらいたいものってなんすか？」手を上げながらシヨウは言

った。

「そりゃあ言ったらつまないでしょ。」

「キルトゝそろそろ時間がやばいぜゝ」

時計を見る。はりはまだ5時をすぎたていどだ。

「まだあせるじかんじゃないと思うけど、レン、なんかあったっけ？」

「今日の分の仕事、まだ半分も終わってねゝけど？」

キルトの体が凍った。

「どうしたんですか？キルト執務官？」

ヒカリが首をかしげながら聞く。

「いや対したことじゃあゝ、もう終わっちゃいました？」 突然現れた女。

「シャーリー遅いよ。」

「すみません。なのはさん達のほうのデバイスを見てたら時間が過ぎちゃって。」

「言い訳は聞かないよ。シャーリー。」

「すみません。キルトさん。」

「やつほゝシャーリー」

「こんにちはサンちゃん。」

「悪いけど後まかしていいかな。シャーリー。ちょっとやらないといけないことがあるんだ。」

「分かりました。やらなきゃいけないことってなんですか?」

「それは……。「ちょっと会う人がいるんだ。じゃあ頼んだよ。みんなすっかり疲れとつといてね。」  
そういうとキルトは走っていつてしまった。

「あのすいません。」

「ああごめんごめん。私はみんなのデバイスの整備とかやらせてもらいます。シャーリーってよんでね。」

「シャーリーさんってキルトさんと仲いいんですね。」ヒカリが4人の疑問に思ってることを言った。

「そりゃあ同じ職場で働いたことがあるからね。」

「「「「!?!?!?!」」」」

4人が目をぱちくりする。

「あっキルトさんに口止めされてたんだっけ。」

「どういことですかシャーリーさん。」

「えっとそれは……」「それ以上言ったらキルトに報告しちゃうよシャーリー」レンちゃん!!」

突然シャーリーのポケットから何かが光った。

取り出して見るとキルトが耳につけてたデヴァイスがあった。

「やつほゝシャーリー」

「いつからいたの?レンちゃん?」

「さっきキルトがずっと私を入れたの」

「キルトさんにはかなわないな」。

そういつつシャーリーは頭の後ろをかくしぐさをする。

「キルトに仕事頼まれてんだからはやくやったほうがいいと思うよ?キルトそういつのうるさいから。」

「確かにそうだね。」

そういつとシャーリーは4人にさらに近づいた。

「みんなのデバイスをさらに強化したいから預からせてくれないかな?」

「私たちのですか?」

「そうそう。さっきの戦闘をもとにね。」

「してくれるんですか?」

シヨウは目をかがやせて言った。

「当たり前じゃない。みんなは機動六課のメンバーなんだから。それを聞くとシヨウはシャーリーにデバイスを渡した。3人もシヨウに続いてわたしてった。」

「じゃあまた明日ね。」

受け取ったシャーリーは小走りですっていった。

「キルトさんにはかなわないな。」  
「そういつつシャーリーは頭の後ろをかくしぐさをする。」

「キルトに仕事頼まれてんだからはやくやったほうがいいと思うよ？キルトそういうのうるさいから。」

「確かにそうだね。」  
「そういつとシャーリーは4人にさらに近づいた。」  
「みんなのデバイスをさらに強化したいから預からせてくれないかな？」

「私たちのですか？」

「そうそう。さっきの戦闘をもとにね。」

「してくれるんですか？」  
シヨウは目をかがやせて言った。

「当たり前じゃない。みんなは機動六課のメンバーなんだから。」

それを聞くとシヨウはシャーリーにデバイスを渡した。  
3人もシヨウに続いてわたしてつた。

「じゃあまた明日ね。」

受け取ったシャーリーは小走りでさっさといった。

「どう思う？」

シャーリーがいなくなつたて起き上がったカインが突然はつした。

「キルトさんのこと？」

「ああ。」

「私は信じてもいいかなつて思うよ。」ヒカリは空を見上げながら答えた。

「でもあの強さはありえなくね。」  
寝たまま言つシヨウ。

「私はいい人だと思います。」  
小さな声で言うアイリ。

「どうしたんだよ？……カイン？」

「……………不思議な人だなつてな……………」

キルトさん（後書き）

「よお、元気にやってるか？」

「……………」

「オレはいつも通りだよ。」

「……………」

「ああ、またお前の所でしごいて欲しい奴らがいんだよ。頼めるか。」

「……………」

「なかなか見所のある奴らだよ。少し性格はわるいかもしんないけど。」

「……………」

「大丈夫だよ。リタイアするやつはいないよ。」

「……………」

「……まだ何も話してないよ。」

「……………」

「……ああわかってる。」

「……………」

「……わかったよ。じゃあ頼んだぞ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1193n/>

---

魔法少女リリカルなのはstrikers ~ ~ ~ 1つの思い ~ ~ ~

2010年10月18日05時16分発行